

わだつみに祈る

中 条 毅

赤きびた丸窓に夕日が映えて、大きくうねる大洋はくれないを染めていた。艦尾の白浪を追ってどこまでもしっく舞っていた二羽のあほう鳥の姿もいつの間にか消え失せて、駆逐艦U号は青白く油を流して突走った。たった今、いくつかの若い生命が無惨に奪われた瞬時とは思われないほど不気味に静かな南の海は生あたたかい風をあびて、きなくさい硝煙と屍体を焼く虚ろな死臭が鼻をつき、まだ生々しく殺氣が流れているような艦内には葉きようがごろがり、甲板のここかしこには鮮かな血がヌルヌルとすべった。皆、ものを言わなかった。

十六才の若い志願兵が逝った同年の戦友を想って黙々と甲板の血を洗っていたが時々、手を休めて、うねる遠くの海原をみつめた。少年の目はぬれていて。中年の応召兵をつかまえて、船よいで吐き出した反吐を指さし「食え、食わんと立派な船乗りになれんぞ」と自分よりも二倍も年上の部下をさめざめと泣かした彼の元氣はどこにもみられなかった。

医学部を出たばかりの秀才のはまれ高い軍医大尉は一挙にでた十数名の死傷者に顔面蒼白となり、呆然自失してなすところを知らず、「大丈夫だ大丈夫だ」とかん高く口走ってはメスをガーゼにつっ

で匍うようにして走り廻るばかりで笑いものの種になり、見事なヒゲの歴戦の下士官の看護長が叱咤督励して手当て処置を一気にやっていた。

航海士のS中尉が機銃掃射をあびて即死したのもこのときであり、鳥島の南方北緯30度の海上を本土に向って北上中の時だった。ガラガラと輝く真赤な夕陽を背にして雲の切れ間から突っこんでいた戦闘機群の鋭い攻撃に、胸の真中から背中にもぬける貫通銃創をうけたSは「ウッ」という一声でそのまま息をひきとった。長身のスポーツマンであったSの背中には金だらいのような穴があいて背骨が粉々に砕けていた。一発の偶然が彼の命を一瞬にして葬り去った。Sは私と同じ学徒兵であり、東京のK大学の学生であった。射ったのもアメリカの学徒兵であったのかも知れない。

やがて日は落ちて、夜半に入ると海は荒れに荒れはじめた。艦は舷灯を消して、暗い海を真黒な怪物のようにまっしぐらにY港に向って波をかけた。大波をくぐり、しぶきをあげるごとに艦全体がミリミリと鳴り、時々、洪水のように甲板を洗う潮が怒号をたてて頭の上をなだれ落ちていった。

死んだように暗い艦内ではあったが乗組員の神経は異常にいら立って、ものさびたエンジンの音が艦底に込みわたるようにひびき、兵のいる居住区からは渴きを訴える負傷者を怒鳴る看護長の声がかえ、幽かな唸り声がかきこえる。非番にいた私のベッドの頭上にはSの骨がよせ書きの軍艦旗の上に安置されていた。マッチをすって一瞬に変わり果てた彼の姿をみつめていると、夕陽のおちんとする甲板で、大男のY兵曹が斧をふりかざして、血にそまつたSの

首を無造作にたたきおとしている光景が目にかんだ。無神経に、まるでニワトリでも調理しているように。

体は水葬にして艦外に流し、おとした頭を石油カンに入れて、ガソリンをかけて茶毘^{チビ}に付した。長髪がまずシリシリと焼ける音を幾人かの友人学徒兵たちは無表情でみつめていた。暗くなって敵機や潜水艦の目標にならない中に幾体かが処置されていた。それに屍体は一日にせよ臭くなり、艦内は腐臭でいたたまれなくなるからだ。

真夜中の船室^{かんしつ}は、ほの暗く、空になった隣りのベッドとSの白い遺骨がからんで私の頭の中を回転した。親しかった彼の骨をとって、何気なくソツなめてみた。塩っぱく石油の臭い、がするだけで彼はそこにいなかった。カルシュームの片であり、物そのものだった。私の魂は砂漠のようにカラカラに乾いて涙も出なかった。

何度かこんな体験をくり返している中に、人間の惨状に対して、牛のように無感動になっている自分に気づいて愕然としたが、バラバラとはねる大型の蛋の総攻撃にさいなまれてその夜は眠れそうもなく、「明日はわが身」と自分の骨をながめているように冷々と妙に胸が痛くなった。そして私はこの世のY兵曹や看護長が何かおそろしい悪魔のようにも感じられ、甲板をウロウロして正気を失った新米の軍医長の醜態や靴下の中に吐いた反吐を食べさせられて青白くヘナヘナとなり毎日泣いていた応召兵の「まじめを滑稽化した姿」がいじらしく思えた。艦には航海士のSの他に電測士（電波探知関係）のO中尉・水測士（潜水艦探知）のK中尉と砲術士の私の四人の学徒出身組が乗組んでいたが「殺し屋」の魂が入っていない婆婆気の多いわれわれはそれなりの醜態を演じたかもしれないからである。

その後、転艦したO君も苦しい戦を重ねて南の海に散っていった。一九〇万トン余もあった日本海軍の誇った艦艇は敗戦時には一六〇万トンが海に消えていたのである。

誰かがいったように「過去において苦しんだ者は現に苦しんでいる者を忘れない。戦争の惨禍はそれを経験した人だけが知っている。」平和運動はイデオロギーや観念的な理論であるまに何よりもまず死者への誓いでなければならぬ。戦争にあげ戦争にくれたわれわれの青春は暗くみじめであった。しかしドイツの学徒兵はざんぐうの中でロソクの灯をたよりにニーチェを読み、聖書をひもといて夢をつないだ。わが国の戦没学生たちも「みていてごらん、きつとわれわれの時代がくる」と誌して未来を信じて死んでいった。

一七八九年の仏革命をフンボルトは二十才でヘーゲルとヘルダーリンは十九才でノヴァーリスは十七才で迎えた。感受性の強い多感な青春期に受けた彼らの深刻な体験は彼らに一つの生きる態度を体得させ、共通の世代を作らせた。そして彼らの世界観はその後の人々に未来を信じ未来に生きる道を教えた。

戦無派世代に対し、戦争の悲劇を再びくり返さない誓いを叫びつづける義務がわれわれの世代に負わされていることを感ずる。

屍焼くかそけき煙 わだつみの

わかれ悲しき 夕風の旅

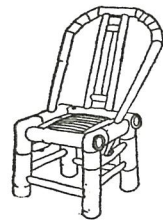
われは鳥 われは海なり わが心

旅愁の思い 瀬戸の夕風

（文学部教授・学務管理）

日曜日の朝

脇 田 悦 三



1

私に怠け癖がついたのかしら、と自分自身を疑うように、首をかしげながら、政和君が訪ねて来たという事務所からの知らせに、暫らく待ってでもらうようにと応えました。

久方ぶりに、教会の日曜礼拝に出るつもりだったのです。イースター以来足が遠のいています。日曜日は学園職員の半数は休暇、それでいて、見学・参観・来訪客と存外雑用はあり、園児諸君はもちろん全員が生活をしている、という諸条件を自らの言い訳にサボリ続けた何十週間でした。今日こそはと心がけていたのに、何かしら出鼻をくじかれたよう

な気持です。しかし、卒園生の相談は私の大事な仕事です、アフターケアというやつです。——手先きは器用だったが、性来の精神薄弱は意思薄弱に通じて、一つの仕事に落着けない政和君です。またそうした就職問題にちがいない——と、あれこれ思い及ぼしながら、教会行きをあきらめて、彼の待つ部屋へ足をむきました。

話はやっぱりそうでした。今働いている中華料理店は仲間のガラが悪いので、他に变りたいが宜しいかと、一応スジが通ったようなことを言うのです。もともと今の店も自分で選んだのです。卒園後の農業（畑仕事）、大工手伝い、病院調理場助手のそれぞれも短期

間だったが、つづいての旋盤工は三年も勤めて、腕も上り重宝がられていたのに、華やかに見える生活に心ひかれて、どうしても変ると言い出した彼だったのです。

ふーん、と私は彼の申し出に一寸考えこんでいる時、学園の園児らの朝礼のベルが鳴りました。私は彼をいざなって、礼拝に顔を出すことにしました。こども諸君の唱う讃美歌。私も声はり上げて歌い、彼もまたそれに和しています。その口もとに、戦後の混乱時に浮浪児として扱われ、知能が低いので私の学園へ来た時の可愛いおもかけが伺えます。

2

児童説教らしきことを話したあと私は、オーガンの音のなかで、私の今日に至ったまでの道のりも想い浮かべていました。——ふと、豊岡佐一郎先生のお顔が目の前を走りました。——同志社のエランビタル小劇場が盛んだった頃、大阪では関西大学を基盤に「七月座」という新劇団があった。もちろんアマチュアの研究グループである。音楽や演劇の好きだった私は、その一員として参加したが、当時の文化活動の苦しさはまず資金面だ

った。演劇論を闘かわすこともさりながら、何とか会計面を赤字から救おうと児童演劇も手がけることとなり、豊岡先生はその部門の責任者に私を指名された。成人演劇の方は志村喬さんだった（氏はその後プロへ）、私はその時から「児童問題」と取組み出した。それはコードモを知らずして、コードモのための芝居も何もないからなのだ。豊岡先生は私をうまく導いて下さって、当時のBK（NHK大阪）の子供の時間の童話や劇にたびたび出演させていただいた。

——そのBKの局の近くに「聖ヨハネ学園」というのがあった。その園長さんだった古田誠一郎先生も、しばしば局に出入なすつていたので親しくさせてもらい、その園へ私もちよくちよく遊びに行った。学園は今でいう養護施設である。小さい男の児、女の児が六、七十人もいて暮している。昼間は小学校へ通う児も沢山いるが、その保母さんたちは朝から晩まで仕事事に追われていらっしやる。よくまあこのように親身な世話が出来るものだなアと私は感心した。どこにそんな力が涌くのだろうと、私はそつとさぐってみていた。すると、日曜日、園長夫妻は教会とい

うところへ足を運んでいらっしやる。はーん、教会とは大したものなんだなアと私は思い、その教会を電話帳でアドレスを調べ、ある日曜の朝、そつと顔を出してみた。私を見つけた古田御夫妻はとても喜んで、牧師先生に私を紹介して下さいました。

——牧師の柳原貞治先生はおだやかな話っぷりながら、しっかりと私のたずなを引きしめ、感情に走りやすい青年をシワジワと人生を考えるものへと導いて下さった。歌の好きな私はクワイヤーのメンバーに入れてもらった。こどもの扱いを勉強したい私は、Sのクラスも持たせてもらった。日曜日曜が愉快だった。キャンプでの修養会にも出た。そしてその間に、キリスト教関係の社会事業施設のあちこちを、それこそ全国にわたって見学するの機も得た。そしてその後、今の白川学園の人間となったのだが、京都に移り住んでの心の安いは、聖三一教会であり、佐々木二郎先生にいだかれた。

——法律を学んだだけで、あとは好き勝手なコードモの文化活動の勉強、それだけじゃ今後の社会事業をになえ得る筈なしと、こちらの父良吉に注意され、同志社の神学科に入学

させて貰い、社会事業専攻生となった。暫くのブランクは相当に語学のおくれを招いており、私も苦しんだが、教授の先生方も悩んでいたことと思う。しかし、ここでも私には良い先生たちばかりだった。直接には竹中勝男先生があれこれ世話をして下さった。

先生というものは、一人の人間が成長していく上に、随分大きい働きをするものなんだなアと、めまぐるしく自分の過去を想い出している時に、学園の朝礼が終って、私は我に帰りました。

私の前に腰かけている政和君は、私を先生と呼んで私に相談をもちかけているのです。先生とよばれる程のバカでなし、という古いことばもありますが、私は彼に慎重さを求め、彼の心の動きの蔭に、完全な一人の孤児だと思っていた彼に兄があり、その兄の所在を最近見つけた私のケアーの行すぎが、かえってマイナスしたことなどを話しあい、少々的小遣いを渡したのです。次の職場での働きを祝う気持だったのです。

3

頼れる人。何かにぶつかった時に、何でも

気易く持ちかけ得る人を持つものは幸せです。

先日、ある非行(?)少年のケース研究がありました。中学生のグループ非行、そのリーダー格です。今、教護院に預けられていて、来春三月には卒業という運びになるらしいですが、その児を扱った諸機関からの直接タッチした人たちが列席されての会合でした。調査官、監察官、保護司、担任教師、生徒福祉司、児童福祉司、教護院教官等々の報告をうかがうと、まことに科学的に緻密であり、そのバトンタッチも一応組織的な運びなので、研究材料としては立派なものでした。が、私は質問してみたのです。「その児が、何でも打ちあけて話し得る相手は誰だと言ってますか。また誰かあるとお考えですか」と。

答は意外でした。誰もないと言うのです。親も不信、先生方も自信なし。強いてさがせばその児の自宅の近くで、こども会などをやっている街のオジサンだろうとのことなのです。では、なぜその方をケース研究のルートに乗せて差上げなかったのだろう、と私は思っています。へたに理論が先行すると、ことを分化しすぎるようです。私どもの施設でもこう

した事例にブツかります。八時間労働という線へ努力したいのですが、現実はなかなかきびしくて飛躍はむづかしく、止むなくダラダラと長い時間の仕事っ振りになるのですが、先日見学に来たアメリカの特殊学級の若い先生は、一日を学園ですこしたあとの話合いで、こんなことを言っていました。「精神薄弱児の人格形成の上からは、今の日本式の方が遙かにいいと思いました。アメリカの施設で三交替制をとっているのを、コードモの側から見ると、一日に三つの施設に通って生活しているようなのです。いくら三人が良く連絡をとっても、三人は三人、どうしてもコードモへの接し方が変って来ます。一般の家庭で夫婦であり、一体である筈の父と母とでさえ、コードモの指導とか教育についてはなかなか一本化出来ないのですから」と。

だけど、日本式が良いと言っても、今のままでは息切れしそうな私たちです。若い方の希望を大きくしてもらう上からも、せめて裏付けが必要でしょう。経済生活の安定が約束をされなくてはならぬでしょう。

日曜日、教会礼拝に行ける余裕もほしいです。

政和君が帰っていったあと、私はまた私の扱ってきた幾つかのムズカシかったケースを頭に浮べていました。

——清君という児もヤンチャだった。これは完全に前向きのヤンチャ。柄は小さかったが行動的だったし、力も強かった。この児の場合も二三の職場を経て、ある養豚場で働いていた時だった。彼がやっと十八才になった頃だと記憶する。幸いに彼の働き振りはその主人の喜ぶところとなり、私はその機会にと、主人に彼の給料もうんと気張ってもらい、他の諸条件も一人前以上にしたのだった。それでも主人は「いやアあの子なら出しましう。なんせあの子は毎日豚とキスするみたいに可愛がつて育ててくれましてな。豚小屋もきれいに掃除するし、大したもんですワ」と言って下さっていた。その清君が二年程たった年の暮のある晩、ひよっこり私の家を訪ねて来た。正月の休みを早く貰ったのかときくと、「チガウ。あんなとこイヤヤ。やめて来たんや」と言う。私は驚いた。

彼は私に、もぞもぞと話しかけた。「園長

先生。豚が大きいとならトラックに乗せられて行よるのん、知ってるか？」と。私は「それが君のこの仕事だろう。育てて、売りはるわけや」とすると彼は重ねて「トラックに乗せられていった豚、どうなるか知ってるか、先生？」。これには私も一寸答えをためらった。「ま、そのお蔭で、おいしい豚肉のご馳走もいただけるじやないか」。彼はたたみかけて泣きそうな声で言った。「そやねんそやねん。みんな殺されよるねん。可哀そうや。どうせ

殺されるとわかってンねんやつたら、あんなに可愛がって育てるのん、いやや。嫌や嫌や嫌や」。とうとう泣いてしまった。

——その清君は、その後、これも父親が神戸で沖仲仕をやっていることがわかり、父を頼っていったが、冷たく扱われたとかで、しばらくどこかへ消えたことがあった。案じていた私に、大阪の裁判所から電話があり、一寸した事件があつて拘留所に入っているが、本人が私に証人をたのんでいるとのこと。私

徒卓越せる教育者熱烈な愛国者、真のクリスト教徒と謳わる」。像の字は大塚節治と背後にはつてある。

山崎為徳先生の像は、岩手県水沢市の北西山崎遊園地にある。三百坪ばかりの小さい遊園地の中央に御止川を背にして、箕作省吾、山崎為徳両先生碑が立っている。像は山崎先生像だけで、箕作先生のはまだ立っていない。やがて碑の左側に建つのであらう。



山崎為徳先生の像

高 橋 勘

碑文は「山崎先生は後藤新平、斎藤実と共に郷の三秀才、熊本洋学校、東京大学、転じて同志社に学び教授となり、新島襄の後継と目せられ優秀な学

で約四十分の当地御訪問をおすすめる。山口県の萩と同様、岩手県の水沢はよき地でもある。

(高校校長)

はあわてて出かけた。手錠をはめられた彼が泣顔で私に話をした。「何にも知らんねん。アンコしてて毎日重たい荷物運んでたんやけど、この間、おやかたに言われて新聞紙に包んだ軽い小ちゃいもんを神戸から大阪まで持って行つたんや、そんならようけ駄賃もろたんや。そんなこと何べんもしてて、一べん聞いてみたんや、何が包んだんねん言うて。そしたら、大阪のとどけ先の宿屋みたいなところで、これナ、注射したらスーツとするんや言うたんで、俺も頼むワ言うて腕出したとこへ巡査が来はつて、つかまつたんや」等と私に訴えた。私は彼の知能の点、今の社会のきたなさを知らぬため、大人どもに利用されたことなどを説明した。お蔭で彼は即時開放された。その後、彼は横浜に移り、ある運送店の係長クラスに進んでいる。

——どう考えても人を育てるのは、やはり人でしょう。私もその人になりたいのです。そのためにも私自身だって、まだまだこれからですから、私を育ててほしいのです。同志社マンの諸先輩よろしく、と折りつつ 擱筆します。

(校友・白川学園園長)